



大劇場の客席から舞台を望む。プロセニウム舞台は、間口が28m×18m、奥行が21m、高さが14m×11mという仕様だ

撮影◎小原啓樹

高崎芸術劇場

オーケストラからバンドまでをサポート
豊かな音楽文化を育む高崎の芸術拠点

〒370-0841 群馬県高崎市栄町9-1
tel. 027-321-7300
web. takasaki-foundation.or.jp/theatre

主な使用機材

大劇場	
コンソール	YAMAHA RIVAGE PM7
プロセニウム・スピーカー	d&b audiotechnik V-SUB, V8, V12
サイド・スピーカー	d&b audiotechnik V-SUB, V8, V12
サブウーファー	d&b audiotechnik J-SUB
パワー・アンプ	d&b audiotechnik D80, D20
スタジオシアター	
コンソール	YAMAHA QL5
メイン・スピーカー	d&b audiotechnik V8, V12
サブウーファー	d&b audiotechnik J-SUB
センター・スピーカー	d&b audiotechnik E8, E12
パワー・アンプ	d&b audiotechnik D80, D20

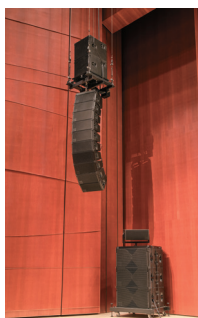
60年近くの歴史を持つ群馬音楽センターの精神を継承しながらも、現代の多様な公演に対応すべく2019年9月20日に開館した高崎芸術劇場。2,027席を擁し幅広い演目が行える大劇場、7間舞台から平土間まで柔軟にレイアウト可能なスタジオシアター、生音の響きにこだわった音楽ホールと、3つのホールを有している。今回は大劇場とスタジオシアターを中心に見ていこう。

まずは大劇場。オペラや歌舞伎なども行えるが、群馬交響楽団の本拠地としてふさわしい響きを有することが大きな条件の1つだったと、高崎芸術劇場の和南城広幸氏は言う。

「大劇場は響きを豊かにし、オーケストラの演奏をサポートするような音響にしたいということになりました。そのため、建築音響の段階からこだわったんです」

理想のサウンドを音響設備の面からも追求すべく、メイン・スピーカーにはd&b audiotechnikのものが採用された。プロセニウム中央にはV8が6基、V12が2基、サブウーファーのV-SUBが1基ずつ、サイドにはV8が8基、V12が2基、V-SUBが2基ずつフライングされている。V-Seriesの採用理由を、施工を手掛けたヤマハサウンドシステム(以下YSS)の神谷康平氏が語る。

「マルチユニットのスピーカーを採用することで混変調ひずみを減らし、よりクリアな出音を目指しました。その考えにマッチしたのが3ウェイのV-Seriesだったんです。また、迫力のある音を届けるため高出力であることも欠かせません。そして、



◀大劇場のスピーカーはd&b audiotechnikで統一。ステージの左右には、サブウーファのV-SUBを2基、ハイボックスのV8を8基、V12を2基ずつフライング。ステージ上には、サブウーファのJ-SUBも片側につき3基ずつ設置されており、その上にはインフィル用のV10Pが見える。さらにプロセシアムのセンターにはV-SUBが1基、V12が2基、V8が6基フライングされている

▶大劇場のコンソールにはYAMAHA RIVAGE PM7が採用されている。その右隣には、マトリクス・コントローラーのHYFAX LDM1を設置。モニター・スピーカーはGENELEC 1032Bだ



▲スタジオシアターのコンソールはYAMAHA QL5。YAMAHAのコンソールは多くのライブ・ハウスで使われており、乗り込みのエンジニアでもすぐに対応できる点などが主な採用理由だとYSSの佐川氏は言う



▲2階席後部の赤いメッシュの内側には補助スピーカーのd&b audiotechnik 8Sが7基、サブウーファのBi6-SUBが1基ずつ格納されている



▲スタジオシアターは移動式の座席を採用しており、座りで最大568人、スタンディングで約1,000人を収容する。メイン・スピーカーは、片側につきd&b audiotechnik V8が5基、V12が3基フライングされており、サブウーファは同社のJ-SUBが3基ステージ上に設置されている。インフィル用のスピーカーはE12だ



▲取材に協力していただいた皆さん。左から、高崎芸術劇場の和南城広幸氏、小見直樹氏、YSSの神谷康平氏、佐川清達氏

普段はスピーカーの性能を最大限に発揮するため露出させますが、持ち込みのスピーカーがある際には格納する必要があるので、フライングで設置することも重要な要素でした」

V-SUBに加え、サブウーファのJ-SUBを片側につき3基ずつステージ上に設置することもあるという。迫力のある低域が必要な公演の増加、導入の理由だと神谷氏は説明する。

「音楽であればロック、演劇では雷のような効果音など、どのような低域であっても十分な迫力が演出できるようなシステムを組んでいます。低域不足とは言われない設備だと思いますね」

さらに、効果音再生用として集中シーリング・スピーカーとウォール・スピーカーが客席側に埋め込まれている。集中シーリング・スピーカーは、d&b audiotechnik E12が7基、Bi6-SUBが1基という構成だ。主に演劇での効果音再生を目的として、シーリング・スピーカーにもサブウーファを組み込み低域を補強することが増えてきたとYSSの佐川清達氏は言う。

「頭上からの豊かな低域の響きも非常に重要になってきています。飛行機が飛び去る効果音などの臨場感が増すため、シーリングのサブウーファが活躍するんです」

コンソールはYAMAHA RIVAGE PM7を採用。システム全体のサンプリング周波数を96kHzで構築し、入出力をDanteで接続できる点がポイントだったと神谷氏が説明してくれた。

「ほかのシステムがDanteネットワークで構成されていたので、コンソールも含めてすべてをDante

接続にした方が構築しやすいだろうということで採用しました。乗り込みのPAエンジニアの方がDante対応機材を持ち込んだ際にも、容易に接続できるという利点もありますね」

こうして組み上げられた音響設備から送り出されるサウンドは明瞭度が高く、来場者からも好評だと高崎芸術劇場の小見直樹氏は言う。

「出音は非常にクリアですし、補助のスピーカーも多数設置されているため、どこの席に座っても遜色なく聴こえます。演劇では2階席だと声が届きにくいというようなことも懸念されますが、客席各所にある補助スピーカーのおかげでセリフもはっきりと聴こえるんです。お客様からも大迫力なサウンドだと評価いただいていますよ」

続いて、座席を格納することでスタンディングにも対応するスタジオシアターを見てみよう。客席だけでなくステージの規模も演目に合わせて調整でき、黒を基調とした内装などライブ・ハウスを思わせる雰囲気漂う。そこには高崎ならではの理由があると和南城氏が解説する。

「高崎市はBOOWYやBUCK-TICKを輩出した街ということもあり、公設のレコーディング・スタジオがあるなどバンド活動が盛んです。そこでスタジオシアターは小劇場的な利用に加え、スタンディングのライブにも対応するホールにしようということになりました」

こちらもスピーカーはd&b audiotechnikで統一。左右それぞれV8を5基、V12を3基ずつフライングしている。サブウーファはステージ上に片側につきJ-SUBを3基設置。さらにセンターには演

劇のセリフやアナウンス用にE12-Dを1基、E8を2基設置している。大劇場よりも小規模な空間ながら、それとほぼ同等のスピーカー構成にしているわけを神谷氏が解説してくれた。

「コンセプトの1つがライブ・ハウスだったため、常設設備でありながら、ライブで使える迫力でなければということで、V-Seriesを採用しました。ロックのライブなどでは低域も非常に重視されるので、サブウーファも大劇場と同じJ-SUBを導入しています。来場者の方々からも、ダイナミックな音像だという感想をいただいていると伺っていますよ」

スタジオシアターではライブや演劇に加え、映画の上映会も行っているという。高崎市は高崎映画祭が開催されるなど映画にもゆかりのある街だ。映画館に匹敵するような鑑賞環境を整えるべく、7.1chでの再生に対応したと佐川氏は言う。

「フロントのL/Rはフライングのものを使っていますが、それ以外は仮設のスピーカーを使用しています。こちららすべてd&b audiotechnik製で、E8、E12、E12Dを上映会の規模に合わせて適切な場所に設置しているんです」

このように、各ホールのコンセプトに合わせて構築された音響設備だが「今後お客様の要望を聞き改善していく予定」と和南城氏は言う。また、小見氏もこれからの運用に期待を寄せ「YSSに組んでいただいたシステムにより、ホールの可能性が広がったように感じます。まだ開催されたことのないさまざまな公演にも対応できるだろうと思うので、楽しみです」と語ってくれた。